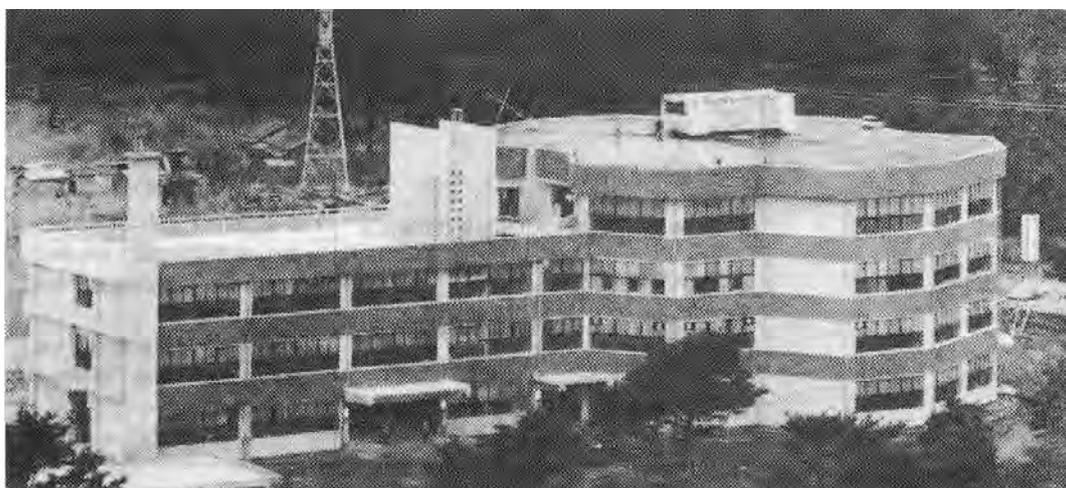


Koudai

Jin

- 1 ●写真で振り返る工大と同窓会の20年
- 5 ●東北工業大学同窓会設立20周年記念事業
樋口陽一先生・岩崎俊一先生対談のお知らせ
- 6 ●ご挨拶
東北工業大学同窓会会長 秋元 俊通
- 7 ●大学の近況
東北工業大学理事・大学事務局長 菊池 誠氏
東北工業大学後援会会長 齋 精一氏
- 10 ●恩師からの便り
電子工学科 平舘 幸男先生
デザイン工学科 山下 三郎先生
- 12 ●活躍する工大人20人
マスプロ電工 伊藤 祐一氏
コールテック 小幡 早苗氏
13 エフ・ディー・シー 和田和紀氏
宮城県土木部 樋口 政志氏
14 日鉄建材工業 三浦 一志氏
鹿島建設 今野 信博氏
15 小西泰孝建築構造設計 小西 泰孝氏
ユアテック 川村 公文氏
16 復建技術コンサルタント 遠藤 敏雄氏
奥田建設 横山 徹氏
17 オリエンタル建設 二階堂 輝幸氏
宮城県土木部 高田 清氏
18 菅原榮設計事務所 菅原 榮氏
19 ZIMA DESIGN 中島 敏氏
アイリスオーヤマ 佐藤 耕平氏
20 デザインアートセンター 出井 幸成氏
デザインアートセンター 出井 好則氏
- 21 ●工大人座談会
株式会社ユアテック編
- 27 ●支部活動報告
新潟支部・北海道支部・青森支部
- 28 ●インターンシップ体験記
- 30 ●同窓会からのお知らせ

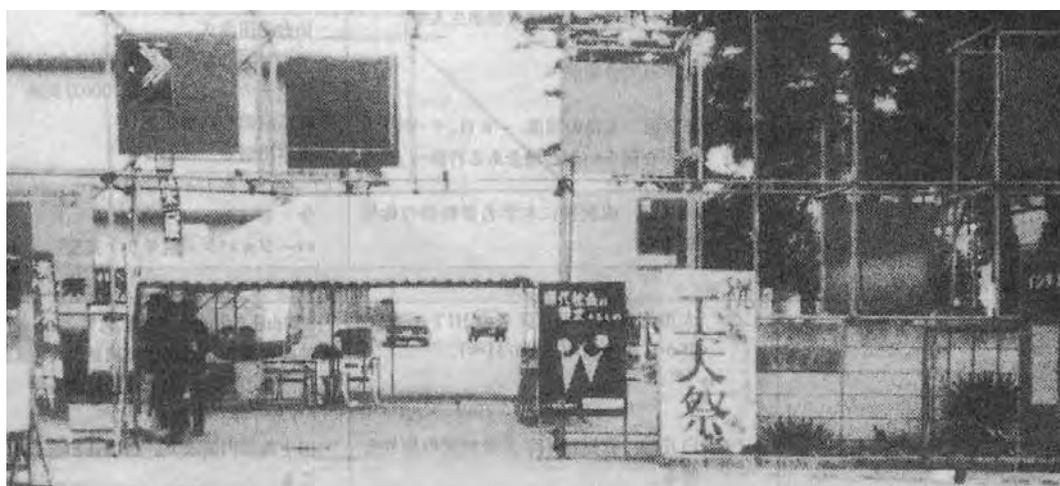
写真で振り返る工大と同窓会の20年



1964 (昭和 39) 年 4 月 15 日、東北工業大学落成 (1 号館竣工)。 4 月 20 日、第一回大学入学式挙行。



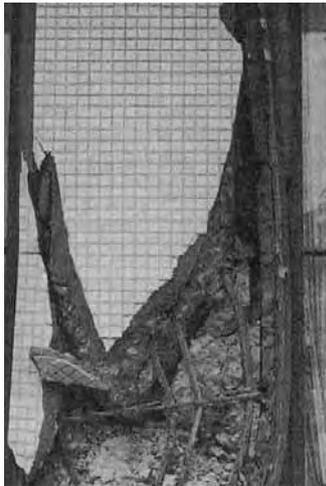
1965 (昭和 40) 年 5 月、1 号館増設竣工、2 号館竣工される。



1967 (昭和 40) 年 9 月 17 日、第一回大学祭「テーマ／人間性と現代科学技術発展と調和」、開催。



1977（昭和 52）年当時の 1、旧 3、5 号館。



1978（昭和 53）年 6 月 12 日、宮城県沖地震直後。左から旧 3 号館、中と右は 5 号館。



宮城県沖地震で被害が大きかった 3 号館を取り壊し、1980（昭和 55）年 4 月 11 日、新 3 号館落成。



1983（昭和 58）年 2 月 20 日、7 号館が耐震建築として世界初の PC トラス工法で完成。



2003（平成 15）年 3 月、9 号館、環境情報工学科研究棟 10 号館完成。



2003（平成 15）年 10 月、仙台市青葉区一番町に「東北工業大学一番町ロビー」開設。



2004 年 ニツ沢キャンパスに第 2 クラブ棟竣工。

同窓会設立 10 周年記念講演会・交流

1996（平成8）年10月19日、
ホテルメトロポリタン仙台にて開催



記念講演会

秋元会長挨拶



記念講演会 岩崎俊一東北工業大学学長による講演



記念講演会 工藤理事長挨拶



記念交流会
沼田学長補佐による乾杯、後援会齋副会長の挨拶



記念交流会と記念テレフォンカード

～新たなネットワークをめざして～

東北工業大学 同窓会創立 20 周年記念事業

樋口陽一先生・岩崎俊一先生対談



岩崎 俊一氏

東北工業大学学長・理事長
日本学士院会員

【テーマ】

「科学技術と文化」

【開催日時】

平成 17 年 10 月 1 日 (土)

14 : 00 ~ 16 : 00

【開催場所】

東北工業大学

トーテックメモリアルホール

(937 番教室)



入場無料

申込みは 9 月 22 日 (木) まで
下記宛 FAX でお願いします



樋口 陽一氏

東京大学名誉教授
日本学士院会員

コーディネーター／立花 鶴憲氏 (株式会社河北新報社 論説委員長)

東北工業大学同窓会創立 20 周年を記念して、憲法学者の樋口陽一先生と母校東北工業大学学長である岩崎俊一先生の対談を企画しました。

現代の日本を代表する憲法学者の樋口陽一先生と、「垂直磁気記録の研究」で世界的に注目される岩崎俊一先生は、共に日本学士院会員という、わが国の学術上の功績顕著な科学者です。この両先生に、コーディネーターとして河北新報社論説委員長の立花鶴憲氏を加えて「科学技術と文化」と題した対談をしていただくことになりました。

当日は、樋口先生と岩崎学長の出会いにまつわる興味深い話に始まり、科学技術と文化に関する両先生の奥深いお話を伺えることと思います。同窓会会員並びに一般市民の方々のご参加をお待ち申し上げます。

<参加お申し込み先>

東北工業大学 就職課内 同窓会事務局

〒 982-8577 仙台市太白区八木山香澄町 35-1

TEL : 022-229-1151 (代)

FAX : 022-229-8002

Home Page : <http://www2.odn.ne.jp/~aan98460/>

東北工業大学同窓会設立 20 周年を迎えて



東北工業大学同窓会会長
秋元 俊通(あきもと としみち)氏
 1949年 仙台市生まれ
 1975年 土木工学科卒業(5回生・都市計画研究室)
 現在 株式会社秋元技術コンサルタンツ 代表取締役

大学御当局を始め多くの皆様のご理解とご支援を頂戴し、当同窓会は2万6千人を超す会員数を擁するに至り、ここに設立20周年を迎えることができました。皆様方に心よりの感謝を申し上げます。

併せて、当会の記念事業の記念講演にあたっては、当大学が誇る岩崎学長・理事長と樋口陽一先生との対談が実現できたことに深く感謝申し上げます。

振り返りますと、当同窓会の設立にあたっては、初代菅野茂会長(電子通信工学科1回生)が生みの苦しみを味わわれました。菅野前会長の実績は「全学同窓会名簿」の発行にあります。この名簿発行によって、各学科同窓会の意見を調整し、更に運営資金を捻出されました。この名簿作成での苦労の甲斐あって、各学科同窓会の独自性を保ちつつそれぞれの信頼と友情を更に躍進させ、諸活動を企画運営することになったものでした。残念ながら菅野前会長は健康が優れず退任されたため、11年前に私が引き継がさせていただきました。

その後の同窓会の実績といたしましては、同窓会々費を終身会費制とし、基金の積み立てを行い、学生へのサービスを積極的に行うために入学時に同窓会に入会していただくシステムといたしました。経済状況が悪化している現在、この学生サービスの一環として、4年時後期学納金の貸与制度を実施しており、毎年3～4人の支援をしております。また、大学への貢献も兼ねまして、機会あるごとに在学生のための進路支援や入学、卒業時に記念品等を贈ることを継続事業としてきております。また、大学では創立40周年を迎え、懐かしい1号館を解体し新1号館建設が行われておりますが、この事業に対しましては当同窓会は協力させていただきたいと思っております。又、この度、同封させて頂きました大学の新たな支援事業

を目的とした寄付募集につきましても、当会の使命と一致をみることから積極的支援を行うことに致しました。会員の皆様の積極的なご支援の程、是非ともご協力をお願いいたします。

組織面といたしましては、新潟支部を皮切りに、その後青森支部、北海道支部が立ち上がりました。更には、(株)ユアテックに職域支部が設立されました。今後、岩手・秋田・山形・関東地区、また職場にも支部を設立して参りたいと思っております。この地域支部等が大学後援会地域支部と密接に連携することによって、卒業生に対しては地域の就職活動の支援、大学に対しては入学生の拡大に対する支援ができるものと考えております。また、私たち卒業生も各地域での様々な情報を共有することにより、互いの利便に供することができるものとも考えております。

「新たなネットワークを目指して」をキャッチフレーズにこの10年間の活動を続けてまいりましたが、今後はこのネットワークの更なる充実を図り、その成果の刈入れの時期になっているようにも思えます。会員の皆様と共に手を携えてこの激動の状況を乗り切り、東北工業大学同窓会の発展充実を力を注ぐ覚悟でございますので、今後共にご指導ご鞭撻並びにご支援を賜りますようお願い申し上げます。設立20周年に当たっての挨拶とさせていただきます。

末文になりましたが、皆様のご健勝と東北工業大学のますますのご発展をお祈り申し上げます。

大学の近況

さらなる飛躍をめざして



理事・大学事務局長
菊池 誠(きくち まこと)氏
1942年 東京都八丈島生まれ
2001年 国立帯広畜産大学退職
2002年 学校法人東北工業大学 理事
同 年 大学事務局長

20周年を心よりお慶び申し上げますとともに、同窓会のご発展、会員の皆様のご清栄とご健勝を祈念いたします。

大学も、創立以来42年目に入りました。これまでの同窓会会員の皆様からの温かいご支援・ご協力に対し、厚く御礼申し上げます。

私学を取り巻く状況は、ますます厳しさを増してきていますが、そんな中でこそ個性輝く大学でなければと思います。そのためには、周囲の方々のお力添えをいただきながら、あらゆる努力を重ね、さらなる飛躍に繋げていくことが大事だと思います。

ここで、大学の近況についていくつかを記し、同窓会会員の皆様のご理解をいただき、さらなる飛躍へのご支援を切にお願い申し上げます。

1. 志願者増・退学者減対策

本学も少子化の影響を受け、入学志願者は年々減少し、平成17年度入試においては、2千人を割ってしまいました。また、退学者についても、最近では100人前後になっています。

このような状況を回復するために、教職員一丸となってあらゆる努力を傾注しており、今後も継続的に努力していかなければならない大きな課題と考えております。

2. 一番町ロビーの活動

平成15年10月1日、仙台市の中心部に開設した「一番町ロビー」は、ニッセイ仙台ビル(9階建)の建物の1階と4階の一部を借受け、1階はギャラリー・ラウンジとして、学生・教職員の作品・研究成果などの発表に、4階はホールとして、オー

ブンカレッジや講演会などに使用しています。いずれも、教育・研究の成果を地域社会に還元することを通して、社会に貢献しようとするものです。

開館してから1年半の実績は、来館者数1万4千人余を数え、特筆すべきは4階ホールの来館者5千2百人余のうち、一般市民が2千2百人も来ていただいたことです。

これからも、良い企画を実施して、大学の顔がより見えるように努めて参ります。

このロビーは、同窓会の皆様にとっても、一つの拠点としてご利用いただけるようにしておりますので、ぜひご活用ください。



「東北工業大学一番町ロビー」

3. 新センター等の設置

研究所として設立以来20年になる情報処理技術研究所は、計算機の小型化、ネットワークの普及、情報教育の進歩などの環境の変化に対応できなくなってきたことから、本年4月から次の3つの組織に改組しました。

1) 新技術創造研究センター

このセンターは、本学がこれまで培ってきた研究資源を活用するとともに、地域の産業と連携して新しい技術の創造をもたらす研究を推進することにより、社会に対して組織的に貢献することを目的とするものです。

2) eラーニングセンター

このセンターは、本学の情報教育の高度化に関するリーダーシップをとり、責任をもって、本学学生のe学習に関すること、学科が推奨する資格取得に関すること、本学における情報教育のあり方等について、研究し、企画・実行すること等を目的とするものです。

3) 情報ネットワーク管理室

本学における情報ネットワークを適切に運用・管理するための組織です。

4. 新1号館の建設

香澄町キャンパスの1号館は、大学創設当初の建物で、近い将来高い確率で起こると予想されている宮城沖地震を想定して、建物の耐震強度等を診断した結果、補強工事を施しても危険な建物との評価になりました。

そこで、理事会の下に設置されている施設整備構想検討委員会に、新1号館建設計画専門委員会を設け、建物の基本計画を策定しました。

プロポーザル方式により選定した設計業者とは、専門委員会のメンバーが中心となって、教職員の参加によるワークショップを開催するなど、協議を重ね、基本設計が完成し、直ちに、施工業

者を指名入札により選定したところです。来年7月末の完成を目指して工事を行い、本年の夏休みには、現1号館の一部解体も行われます。

なお、現1号館の全ての解体は、新1号館の完成を待って実施されます。

新1号館は、学生との関わりを第一義に位置づけ、学生サービス、執務スペースの一元化を実現しています。

建物の概要は、別掲のとおりで、9号館・10号館に続く新棟の建設となります。

新1号館の建設に伴って、正門の位置を現在の西門に変更するとともに、外構整備の一環ととらえ、バス停などの整備を関係当局に要請していく予定です。

5. 学生の奨学支援

経済的に困窮している学生が増加傾向にあり、これらの学生に対する奨学支援が重要課題になっています。

そのため、本年度から、銀行と提携した「学費ローン利子給付制度」を発足させました。加えて、本年度から5年計画で2億円の寄附募集を行い、その半額を学生の奨学支援に充当することとし、各方面にお願いすることになりました。

同窓会に対してもご協力をお願いいたしますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



公道より新1号館を見たイメージパース

<新1号館の主機能>

1階 (学生談話、一元化の学生窓口・仮称：ウェルネスセンター等)

2-3階 (教室、事務管理部門)

延床面積 5,185m²



中庭より新1号館を見たイメージパース

大学の近況

同窓会の益々のご活躍を祈念して



東北工業大学後援会会長
齋 精一(さい せいいち)氏
有限会社 ウエスギ通商 相談役
1936年 仙台市生まれ
1960年 東北学院大学文経学部経済学科卒
2003年より東北工業大学後援会会長に就任し現在に至る。

同窓会会員の皆様には、日頃から後援会の運営に関しまして格別なるご理解とご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。また、この度は「同窓会設立20周年記念特集号」の発刊、誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

後援会も発足いたしましたから20年目を迎えておりますがこの間、後援会事業の最重要施策であります地区別父母懇談会開催の時に実施されます講演会の講師として同窓会からご協力を賜り、この誌面をおかりして心より厚くお礼申し上げますと共に、今後ともよろしくご協力お願い申し上げます。

本年4月1日からペイオフの全面実施、個人情

報保護法が施行されている昨今、後援会も自主管理、責任施行に心がけ、親と子供が共有できることを重点的に考えていきたいと思っております。(地区別父母懇談会・大学見学会・同窓会との懇談会等々)

つきましては、東北工業大学・同窓会・後援会の共有出来ることは、大学の益々の発展のために寄与することと思われれます。後援会は同窓会との連携を強化したいと考えておりますので、今後共同窓会会員の皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。

ここに同窓会の皆様の益々のご活躍を祈念いたしまして、ご挨拶といたします。



平成17年度東北工業大学父母懇談会より



故郷は近くにありて…



平舘 幸男(ひらたて ゆきお)先生

1977年 東北工業大学 教授
 1984年 電子工学科長
 1996年 学長補佐
 2005年 退職。東北工業大学名誉教授、
 中国ハルビン工業大学顧問教授、
 中国長春理工工業大学名誉教授

37年間の工大勤務を終えて、この春リタイヤしました。工大を卒業したといえ、同窓生と立場は同じです。皆さんにとって工大は母校ですが、私の母校は異なります。でも工大は皆の故郷です。「故郷は、遠くにありて思うもの」。近くには客観的になりえず、いつも主観的に見つめてしまうことへの警鐘でしょうか。

「他国に出でて自国を理解する」も似たような言葉でしょう。住んでいては見えないことが、他国から見ると良く見えてくるといいます。交流無しにはこの言葉は生きてきません。そのためには自国に関する質問に答えなければなりません。自国のことを良く勉強し、相手に感銘を与える必要があります。でもとんでもない質問に窮することは覚悟の上で。「日本は雪が降るのか」は愛嬌ある問い。「日本は何時中国から独立したのか」にはどう答えますか。

私は団体旅行の経験がないので、効率の悪い旅をしては、後になって赤面を覚えることもしばしば。旅の恥は掻き捨ての連続です。でもできるだけ、そこで生活している人との交流を心がけています。先年、デンマークに寄ったとき、アンデル

センの故郷オーデンセに行きました。そこで道迷いをしていると、老夫婦が声をかけてくれ、自分たちもその方向へ行くので案内してくれるとのこと。二人とも高校の先生でご主人は校長もされたとか。今は二人とも引退して年金生活です。日本には興味を持っているが、話をしたのは初めてだとのこと。途中市役所、教会と思わぬところを案内されました。街中の歩道の美しさを尋ねると石畳は中国からの輸入品とのこと。ガイド本には載っていない思わぬ収穫を得たのです。税金、福祉、日常生活、農業立国など短時間の間デンマークのことを紹介していただきました。

「故郷は・・・」も「自国を・・・」も現実には多くの人には無縁の述語に見えてなりません。でも「母校を思う心」は実態があります。40年の歴史を持った母校には長年経営理念と大学運営との乖離が存在し、個性輝く道に陰りが残っているようです。近年かかげた「創造から統合へ 仙台からの発進」のスローガンの下に個性豊かな大学へ成長することを願っています。「故郷は近くにありて思うもの」。私も在職中とは異なる視点からものが見え始めました。同窓生個人でも同窓会の

組織としても主観的から客観的観察が可能になっておられるでしょう。もっと頻繁に工大を訪れ母校を盛り上げてみませんか。



最後の研究室の学生たちとのゼミ風景

とどのつまり



山下 三郎(やました さぶろう) 先生

1969年 工業意匠学科 助教授
 1982年 工業意匠学科 教授
 1994年 通商産業大臣功労賞 受賞(伝統工芸産業)
 1997年 通商産業省生活産業局長
 ロングライフデザイン賞 受賞
 1998、99年 グッドデザイン賞 受賞
 2005年 東北工業大学名誉教授

「人生七十、古来稀なり」の古希である。いつ死んでもおかしくない年を迎えたことになった。とりあえず大学を去っての開放感を味わっているところだ。この気分は何からくるのか考えてみると、教育から開放された点にあるようだ。卒業後どんな社会的進路を学生に選択させることが出来たか。なにしろ毎年、学生が満足できる結果を出さねばならない。

もっとも教育の成果をあげるのは、物理的に簡単なことだと今でも考えている。技術教育の利点を生かして、学生を相手にする時間を十分にとればよいだけであるからだ。ところが世の中の事情が変わってきている。社会で年長者に、家庭では親に従う子供がいなくなれば、大学教育にも連なってくる。師弟関係が成り立たなくなっているのである。今頃古いこと口にするなあ、と言われるかもしれない。社会への第一歩を踏み出させるために、研修の時間帯で身の回りの掃除の仕方から挨拶の言葉まで仕込まなければならない。

ところが簡単にこちらの言うことなど聞いてくれる筈もない。私の方は単位を認定する権限と権威をもっているから脅かして従わせることはできる。これでは形に従わせるだけで中身が伴わない。

中身を伴わせるにはとてつもない時間が必要となる。かつてテレビのCMで猿の反省ポーズが大受けしたことがあるが、あれと同じだ。みんな世相の実態がよく分かっていたのだ。だから、あの猿のしぐさを見て苦笑いしながら納得していたのだ。

ロシアにはアネクドート(小話)というパロディーで溢れている。たとえばこんな具合だ。

註「問「キリスト教と社会主義の共通点は何か？」答「キリスト教は清貧を解き、社会主義はそれを実行した」」。鬱積した現実をパロディー化するのにロシアがアネクドートで日本がCM、その違いを論じても始まらない。

今の現実を作ってきたのは大人であって、子ども達ではない。システム化指向の社会が一元化社会の狭い枠組みをつくって、子どもの誕生のときから社会システムに組み込んできているのだ。個人の人生も効率的なのだ。長い一生と仕事を区分けできていない大人たちが増えているのかもしれない。人生は生老病死、走ればつまずく、自分で操作できるわけもない。システムの中が全てだから死に急ぐ大人たちが出てくるのだ。私といえば晴耕雨読、土に近づいている今日この頃である。

(註 引用資料：独裁者たちへ！！ 講談社 + α 文庫)



退職記念講話会
 (平成 17 年 5 月 21 日・ホテル仙台プラザにて)



退職記念パーティ(同左)

活躍する工大人

恩師に感謝

伊藤 祐一(いとう ゆういち)氏
1946年 北海道札幌市生まれ
1969年 通信工学科卒業(2回生・加藤研究室)
現在 マスプロ電工株式会社 取締役

学校を卒業して早いもので、もう36年も経ってしまったのかと思ひ知らされるこの頃です。

今は亡き、内田学長や加藤先生にアンテナのメーカーでマスプロと言う会社があるからと紹介されて、そのまま現在に至ってしまいました。UHFのテレビ放送が始まりかけ本格的なUV放送時代に突入した時であり、研究室で勉強した電波伝搬の知識や測定機器などの取り扱いがすぐに役に立ちありがたく感じたモノでした。

今の世の中は、アナログからデジタルの時代に移り変わりつつあります。テレビ放送もアナログからデジタルに切り替わります。今見ているアナログの地上テレビ放送は2011年の7月で停止され、全てがデジタルのテレビ放送に切り替わろうとしています。そのため国策としてデジタル放送に移行するための対策作業が全国各地で進められています。マスプロ電工も全国でこの作業に携わっており、私は現在このデジタル化の対策関連を担当しています。

最近の世の中はスピードと変革の時代です。ゆとりのある生活をとの話もありますが、企業で働く者としては、ますます厳しい環境になっていくのではないのでしょうか。その為にも、東北工業大学同窓会を大切に、同窓生の絆を強く、情報交換などを含めた良きネットワーク活用をして頂きたいと思ひます。



ケーブルテレビショーでの出展ブース

face to face



小幡 早苗(おばた さなえ)氏
1949年 仙台市生まれ
1971年 通信工学科卒業(4回生・橋本・古賀研究室)
現在 コールテック株式会社 代表取締役

工大を卒業して早33年になります。現在は携帯電話及び通信情報機器関連の事業に取り組んでおり、15年を経ようとしております。

私は学生時代硬式野球部に所属、卒業後も社会人から軟式野球とずっと野球に関わり続け、2000年から機会があって本学の硬式野球部の監督をしています。かつては全国大会にも出場した経歴もあるチームですが、今は仙台六大学リーグBクラス。“なんとか近いうちにTOPクラスにまで育て上げたい”という目標を持ち目黒裕二・遠藤拓コーチ(OB)と共に体力と気力の続く限り取り組んでいきたいと思っております。私は仕事でも野球でも、人と人のコミュニケーションを第一に考えて行動しております。情報産業に携わっている関係上、インターネットの発展は必要不可欠なことではありますが、人と人のコミュニケーションの概念さえも変えてしまいそうな昨今こそ、コミュニケーションの原点は“face to face”なのではないかと思ひます。私はこの“face to face”という言葉を自分のモットーとして、これからも仕事に、そして野球に全力投球していく所存であります。同窓会の会員諸氏も“face to face”を見直してはいかがでしょうか。今後の同窓会の益々の活躍と、工大の益々の発展を心よりお祈りいたします。



第56回東北地区大学総合体育大会

活躍する工大人

なくてはならない存在



和田 和紀(わだ かずのり)氏

1948年 茨城県金砂郷町生まれ
1971年 電子工学科卒業(4回生・宮本研究室)
現在 株式会社エフ・ディー・シー 代表取締役社長

学生時代を思い起こすと楽しかった思い出ばかりが浮かんできます。たった4年間ですが、好きなコンピュータを使って徹夜で卒論の研究したことや試験の前になると仲間の皆で下宿に集まり一夜づけの勉強をした事、また、未来の夢を夜も寝ずに熱くなって語り明かした事、お金がなくて仲間といろいろなアルバイトをした事、雨の日も雪の日も休まず朝早く通い続けた居合道場での厳しい稽古など、学生時代を過ごした4年間こそが、これまでの人生で最も充実し輝いていたように思います。毎年、求人への為に仙台を訪れる度に、この地で学び得たことを誇りに思えるとともに、喜びで心が熱くなるのを覚えています。

社会人として働く為のエネルギーがこの工大生の時代に養われ蓄えられたように思います。

現在、コンピュータのソフト会社を経営し、お客様や学校関係の皆様のご指導とご支援により数百名の社員を抱える規模になりましたが、工大からは10年来、毎年数名の学生が入社しています。皆本当によく頑張っておりまして、成長の早い人は数十名の部下を抱え、お客様の厚い信頼を得て、会社になくてはならない存在として活躍しております。今後IT業界はますます発展すると見込まれます。やる気に燃える学生は是非とも当社に入社して下さい。私を始め先輩方も待っています。



年度経営計画全社コンベンション

みやぎの住宅 産業プロジェクト



樋口 政志(ひぐち まさし)氏

1947年 仙台市生まれ
1970年 建築学科卒業(1回生・齋藤研究室)
現在 宮城県土木部次長

突然の投稿依頼に臆することなく、仕事上で抱えていることをお話ししてご支援を仰ぎたいと考えました。今、宮城県では、景気浮揚、雇用創出を目標に緊急経済産業再生戦略と銘打って各種事業を展開しています。その中で、私が担当している「みやぎの住宅産業プロジェクト」では、必ず来ると言われている宮城県沖地震の被害を未然に防止するために、補助制度を創設して住宅の耐震診断、耐震改修工事の促進を目指しております。昨年度の改修工事は昨年から実施しておりますが、年度当初から動けなかったこともあって、目標値を大きく下回ってしまいました。今年度は再生戦略の最終年でもあり、昭和56年以前に建築された住宅は、是非一度耐震診断をされ、耐震性がない住宅は改修まで施工して頂けるよう、皆さん自身の住宅はもとより親戚の方にもご教授願ひ、安心して過ごして頂ける住まいづくりのご支援をお願いするものであります。貴大学の先生には、田中礼治教授を始めとする研究室の先生方と日夜、地震対策でお世話になっており、特に地震防災教育として若い世代に防災力の継続を、中学生、高校生に「耐震診断授業」という形で実施し、県内市町にインパクトを与え啓発しております。



耐震診断授業

基本がすべて



三浦 一志 (みうら ひとし) 氏

1951年 青森県弘前市生まれ
1975年 建築学科卒業 (6回生・高橋研究室)
現在 日鉄建材工業株式会社東北支店

今年3月末で、入社30年を迎えたところです。個人的には30年という年月に、一種の感慨を感じています。

当社は、新日本製鐵の関連会社で、鉄鋼商品のメーカーです。建築関連については、Uコラム、角パイプの素材系商品等。土木関連では、ガードレール、コルゲートパイプ等が知られているかと思えます。

私は建築出身ですが、入社以来、その大部分を土木分野で過ごしたことになります。専門は森林土木分野及び、防災分野です。

そもそも、建築それも構造がやりたくて入学したわけですが、幸い前述の分野は特に鋼製の構造が基本となっており、一見畑違いではとよくいわれますが、その様なことは無く天職と感じつつ奉職しています。

さて、今まで、仕事に従事している中で、基本の大事さを痛感してきました。例えば、本を読む事 (活字に触れること)、技術系で言うと、そもそも鋼材応力とは?とか、単純梁の解き方等、一見常識的なところに基本のポイントがあると思っています。基本が全てといっても過言では無いと思っています。その強化が必要かと思っています。今、当社には、本学出身者は6名が在籍しています。今後も異業種面からの情報発信をしたいと思っています。宜しくお願いいたします。

工大人として…



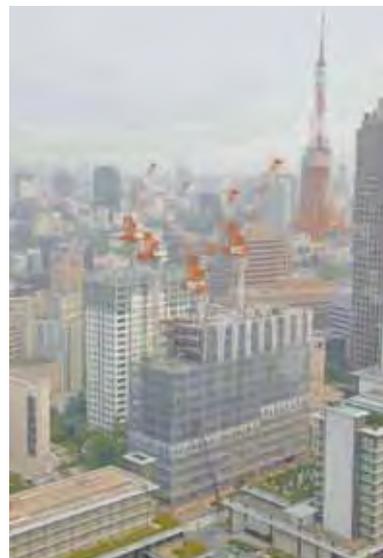
今野 信博 (いまの のぶひろ) 氏

1962年 仙台市生まれ
1984年 建築学科卒業 (15回生・川股研究室)
現在 鹿島建設株式会社

時が経つのは早いもので卒業してから21年が過ぎ改めて驚いている次第です。私は卒業後鹿島建設に入社し、東北を中心に建物を造ってきました。現在は東京虎ノ門において住宅・オフィスのツインタワー (超高層) の現場に配属となり工務次長を務めております。

実現しませんでした当初この現場の副所長に工大出身の先輩が内定しておりました。また、昨年関連会社から工大同期生が出向してきたりとこの広い東京で工大出身者とピンポイントに遭遇し、そのすそ野の広さを感じておりました。社外に目を向けてみても相手が施主であったり設計事務所の先生、関係省庁の担当官、取引相手であったりと様々な場面で、多数の工大出身者と出会い、同窓が故の恩恵も数多く得てきました。

仙台人として楽天・ベガルタを応援するように、日本人としてジーコジャパンを応援するように私は工大人として工大同窓会を応援していき、また、その人脈を大切にしていきたいと思っています。



東京虎ノ門・ツインタワー (超高层) 現場

設立20周年は単なる通過点にすぎません。30周年、50周年とますますの発展を遂げるよう皆で盛り上げ同窓会をより一層充実させていきましょう。

活躍する工大人

創造的な仕事において非常に重要なことは

自由に弾力的に 物事を考えていく 姿勢です



小西 泰孝(こにし やすたか)氏
1995年 本学建築学科卒業 (26 回生・川股研究室)
1997年 日本大学大学院理工学研究科修了
(株)佐々木睦朗構造計画研究所
2002年 小西泰孝建築構造設計設立
現在 小西泰孝建築構造設計 代表

在学中、川股重也本学名誉教授に“構造デザイン”の面白さを教えて頂いて以来10年間、一貫して建築構造デザイン・構造研究に関わる仕事に従事しています。“構造デザイン”とは、単に構造安全性を確保するだけではなく、建築全体の美しさや機能性を追求しながら、創造的な構造設計を行うものです。定禅寺通りの「せんだいメディアテーク」などは優れた“構造デザイン”の好例として、世界的に高い評価を受けています。

このような創造的な仕事において非常に重要なことは、既成概念にとらわれることなく、自由に弾力的に物事を考えていく姿勢です。人間は、無意識のうちに、できることできないこと、良いこと悪いこと、などを限定して考えてしまいがちですが、少し目先を変えて物事を捉えれば、様々な新しい可能性が見えてくるものです。

4年次の卒業研究で、先生に大変自由な雰囲気の中で研究させてもらったお陰で、自然とそのような習慣が付いたように思います。現在は、東京都港区にアトリエを構え、小さなレストランのテーブルから海外の大規模建築まで、様々な“構造デザイン”を手掛けていますが、そのプロセスにおける思考方法は、在学中に身に付けたものが今でも生きています。



コミュニケーション が大事



川村 公文(かわむら こうぶん)氏
1950年 盛岡市生まれ
1973年 土木工学科卒業 (3 回生・大沼研究室)
現在 株式会社ユアテック 電力本部 土木建設部長

東北工業大学を卒業して、社会人となりはや30年以上が過ぎました。

私、今現在、株式会社ユアテックの土木建築部に勤務しております。大学卒業後入社した会社は、東北電気工事株式会社であり平成3年に、今の社名に変更となりました。

当社は、新潟を含めた東北7県に90の事業所を構え、従業員数約4100名で構成され電気、情報通信、空調、衛生水道、消防、土木、建築等の企画、設計、メンテナンスサービスを東北電力、官公庁および一般等より工事の受注を行い、社会のあらゆる方面で広く活躍しております。

また当社には、東北工業大学の卒業生が土木工学科、建築学科をはじめ、各学科を合わせ約130名おり、昨年度、社内の同窓会を発足し活発な活動を行っており、今後さらに大学と一体となり同窓会として、積極的に協力を行って行きたいと思っています。

この同窓会は、学科は違うものの共通して言えることは、全員が物事に対し誠心誠意行動をし、人と人との繋がりを大事にしてコミュニケーションをはかっております。社会に出てからは担当業務に必要な知識・技術を要求されます。学生時代には専門分野の基礎となるものをしっかりと身に付けると共に、専門分野以外の知識や社会情勢にも目を向け、人と人とのコミュニケーションを十分に築き上げすばらしい企業人になっていただきたいと思っています。

ホームドクターを 目指す



遠藤 敏雄(えんどう としお)氏

1952年 宮城県白石市生まれ
1975年 土木工学科卒業(5回生・佐藤・高橋(龍)研究室)
現在 株式会社復建技術コンサルタント 取締役総合企画室長

本学を卒業後直ちに弊社に入社し、構造関係の職務で30年を迎えました。これまで主担当で設計した橋梁は100を超えました。最近では東北地方整備局三陸国道事務所の思案坂橋(写真)を担当し現在架設中です。架橋位置の地形地質や環境に合う形式を模索しながら、日進月歩の新技术・新工法を駆使し、コスト削減を目指して設計に携わっております。

東北地方の橋梁は、日本海の荒波による塩害や凍結防止剤散布による塩害、凍結融解など過酷な自然環境下に置かれています。これらへの対応として、国土交通省東北地方整備局では「設計施工マニュアル 橋梁編」の改訂が行なわれ、今回は耐久性向上に主眼を置いております。建設コンサルタント協会東北支部として改訂作業に携わってきましたが、地域特性を考慮しかつ十分に議論されたものであり、今後の設計施工、維持管理に生かされていくものと思えます。

東北の橋梁も例外なく更新時期が迫ってきており、アセットマネジメントが提唱されております。少ない事業費でどの様に維持して行くかが大きな課題です。地元の企業として、また、技術者として地域の生活基盤の確保に役立つことが責務と思っております。まだまだ力が足りませんが東北のホームドクターとして活躍したいと考えております。



三陸・思案坂橋

「仮説」と「仮設」



横山 徹(よこやまとおる)氏

1955年 仙台市生まれ
1977年 土木工学科卒業(7回生・盛合研究室)
現在 奥田建設株式会社 土木部長

工大を卒業して28年が経ちました。4号館の一番下の盛合研究室でのコンパが懐かしく思われます。娘、息子が当時の私の年齢になっており改めて時の経つ早さを感じます。

卒論のテーマは電気探査法による地盤解析でした。地面に電気を流し抵抗値から地下の地層を推定するものです。場所は宮城県の岩沼、巨尾周辺でした。解析をはじめると不可解な部分が多く、計測したデータの信頼性を疑いたくなりました。悩んだ末、阿武隈川の流れに、ある仮説を立てました。解析を進めていくと、この仮説を証明するような結果が出てきたのです。そうすると、自然に熱が入ってきて、充実感が味わえた卒業研修となりました。

日常の仕事の中で、いろいろな仮説をたてて、実証していくということは、何気なく行われていることだと思います。そして、仮説が思い通りのときは気分が良いものです。工事を担当する方の一番の腕の見せ所が仮設ではないでしょうか、現場の仮囲いから、安全施設、用排水、電気、通路、土留、…。これらの仮設の良し悪しが工事のやり易さを左右しますので、計画には気を使いますが、アイデアや新しい試みを織り込む楽しみもあります。完成したときには、無くなってしまっている仮設ですが、うまくいったときの達成感は、別格です。

今年4月に「公共工事の品質確保の促進に関する法律」が施行され、発注者は、価格だけでなく品質の確保や安全の確保、環境の保全に対する技術力や技術提案力、創意工夫などで総合的な評価をする時代になりました。これからも自由な発想で考えられる仮説と仮設を大切にして、付加価値のある仕事をしていきたいものです。

活躍する工大人

今だから 大学生活が とても懐かしい



二階堂 輝幸(にかいどう てるゆき)氏

1968年 仙台市生まれ
1991年 土木工学科卒業(21回生・小出研究室)
現在 オリエンタル建設株式会社 東北支店技術部設計チーム課長

同窓会会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。私が工大を卒業してから早いもので14年が経ってしまいました。

私は工大を卒業した後、オリエンタル建設(株)に入社しまして、主にプレストレストコンクリート道路橋の設計・施工に携わってきました。平成8年～平成11年までは、本社で耐震設計や鋼・コンクリート複合構造の研究に携わりまして、その研究成果をまとめて技術士の資格を取得することが出来ました。平成13年には、私が施工に携わりました福島県いわき市の森のわくわく橋(写真)が土木学会田中賞を受賞することが出来ました。

今年の3月に工大で開催されました土木学会東北支部の技術研究発表会に参加する機会がありました。久しぶりに訪れた母校で、4年間を過ごした大学生活をととても懐かしく想い出しました。

今までは、まだ若いという思いもあり、同窓会の活動に積極的に参加するという考えは正直ありませんでした。しかし、30代後半となり、会社における自分のポジションも変わりつつあります。同窓会の活動などで少しでも今後の業務等に役立てられればと考えておりますので、同窓会会員の皆様どうぞ宜しくお願い致します。



いわき市・森のわくわく橋

土木技術者の 活躍の場は 決して減少しない



高田 清(たかだ きよし)氏

1947年 石巻市生まれ
1971年 土木工学科卒業1回生・高橋(彦)研究室
現在 宮城県庁 大崎地方ダム総合事務所長

宮城県西部鳴瀬川上流に満々と清水を湛える「漆沢ダム」。私は、完成して24年経過したこのダムで、洪水調節・用水確保を目的とした施設の点検・操作管理の責任者として携わっています。

こうした土木施設(道路、河川、港湾、海岸、上下水道等)は私達に暮らしの豊かさや便利さをもたらし、同時に自然災害から私達を守り、暮らしの安心・安全を確保してくれます。

しかし、施設整備が進み、公共事業削減論の渦巻く中で、これまでに蓄積してきた社会資本ストックは、近い将来寿命を迎え、急激に維持管理・更新投資の必要が生じて来る事は必須です。

また、近年の気候変動に伴い続発する集中豪雨水害、近い将来起こりうる大規模地震と津波等の自然災害に備える質の高い施設の整備や情報伝達のソフト対策も急務であります。

こうした状況の中で、今後、土木技術者の活躍の場は決して減少するものではないと考えます。

経験上、特に土木は、お互い連携・情報交換は必要で、仲間づくりが極めて大切であります。

今後、工大同窓会が益々充実発展され、卒業生の情報交換の場として最大限活用されることを期待しております。



宮城県加美町・漆沢ダム

同窓会設立 20 周年によせて



菅原 榮 (すがわら さかえ) 氏

1948年 仙台市生まれ
1971年 工業意匠学科卒業 (1回生・横田研究室)
現在 株式会社菅原榮設計事務所 代表取締役

工大工業意匠学科第1回生として今まで生きてきました。卒業以来、社会生活36年になります。あっという間の年月でしたが、その中にも色々な場面が思い浮かんでいきます。

まずは、同窓会設立20周年をお喜び申し上げ、関係各位のご尽力を感謝致します。

仙台国分町入口のDUCCAのサインは、巷では非常に目立つとの事ですが、この店舗チェーンも全て私共の業務として設計監理をさせて頂いております。今や飛ぶ鳥を落とす勢いの飲食店サービス企業として有名ですし、数十店舗を展開中です。

商業建築関係が設計監理のメインですが、住宅・マンション・社屋・寺社・教会・等々ありとあらゆる物件をさせて頂いており、クライアントは他県にも多数おられ、大変光栄に、又生きがいとしております。

さて、工大人に夢のある一言とのご依頼ですが、私自身、大それた事と思いますが自分の経験上の事をお話させて頂きます。業務内容上、センスとかデザイン力とか色々問われている様ですが、最終的には、経験の多さ、豊富さにつきると思います。それも精一杯の集中力と貪欲な好奇心を持つてのことですが。多く繰り返す事で、身に付き、それをもって応用力が付き、豊かな発想が生まれ、その中からより良い物をセレクト出来る巾が生まれ、

物件、物件により、より良い物を対応して頂ける事と思います。その結果、社会的な評価を得て、多くの物件依頼が来る。そんな流れの中で、プロ意識が生まれ、自信をもってプレゼンテーションが出来る、結果が出る…。

そんな事を思うに、学生時はどうかというと、大学は基礎教育、社会は経験とはいうものの学生時代の社会経験も非常に大事かと思われます。

私は、たまたま実業高校だった事もあり、大学在学中は、社会勉強と称して、設計・デザインのアルバイトを多くしていました。それが良くも悪くも、社会生活に大きな貢献をしてきたようです。

多くの大学が、将来に於いて深刻な状況になる事が予想される中、我工大は、社会とのパイプをより多く持ち、学生にもそのチャンスを与え続ける事が、今まで以上に大事かと思えます。益々の能力主義時代に対応する為にも。

最後に工大の益々のご発展をご祈念申し上げます。



仙台市国分町・DUCCA 国分町店

活躍する工大人

世界に羽ばたく デザイナーを 夢見て



中島敏 (なかじま さとし) 氏
1956年 仙台市生まれ
1979年 工業意匠学科卒業 (9回生・山下研究室)
現在 ZIMA DESIGN 代表

20年間慣れ親しんだ、アイリスオーヤマ株式会社をこの2月に退社いたしました。在学中からの夢でありました、デザイン事務所を仙台市内に3月開設いたしました。

正直、「ものづくり」から離れたくない、自分の企画やアイデアがダイレクトに表現でき、それが市場で評価される喜びを感じつつきたいとの思いからでした。現在、開設間もなくあれこれ大変ですが、十分な手ごたえは感じております。

また、3年ほど前から、デザイン工学科で2年生の「デザイン計画演習」の非常勤講師をしておりますが、2年生と言うこともあり、スキルが低くアイデアスケッチの描き方から指導しなければならないレベルですが、終盤には何とかプレゼンテーションの出来るまでになります。思い出しますが、その当時、印刷論を今野平版(現在ユーメディア)の故今野社長から受けておりました。それはオフセット印刷機などの機械を目の前にした、血の通う実践的で大変興味深いものでした。私の学生の頃の、この感動を今の学生にも共用したく、現場の「ものづくり」のリアルな話を通して、デザインの楽しさ、厳しさを知ってもらえたらと思います。

この中から「世界に羽ばたくデザイナーが育ってくれたら、老後の楽しみが増えるな」などと思いつながりの熱い講義です。



第13回アイリスデザインコンクールにおいて「光源字」ソーラーで表札が光、という作品で優秀賞を頂きました。

大学の デザイン教育が 重要



佐藤耕平 (さとう こうへい) 氏
1968年 秋田県生まれ
1983年 工業意匠学科卒業 (23回生・梨原研究室)
現在 アイリスオーヤマ株式会社

月日の流れは速いもので、私が工大を卒業してから既に12年が経ちました。卒業と同時にアイリスオーヤマに入社し、デザイナーとしておそらく他では味わえないような様々な経験を積ませていただきました。はじめはプラスチックの会社と思っていたのですがどんどん事業領域が広がり、金属製品や木製家具、ファブリック、家電、ペットフードや培養土など、あらゆる生活用品をデザインすることができました。

2005年4月から商品開発部長となり、責任者としてより多くのスタッフを率いるようになりましたが、その中で様々な人材を見て感じたのは、やはりデザイナーとしての活躍には大学におけるデザイン教育が非常に重要な位置を占めているということでした。

弊社は本社を仙台においているということもあってデザインセッションにはもともと工大出身者が多いのですが、人数の多さ以上に重要なポジションを担っている人材が多く、工大の教育内容の充実を反映しているひとつの例といえると思います。

工大の同窓会は、社会の様々な分野で弊社以上に活躍しておられる卒業生の皆様と交流できる場と考えておりますし、私もその末席に加われることを大変うれしく思っております。



アイリスオーヤマのデザインセッション

卒業してから 早 33 年



井出 幸成(いで ゆきなり)氏
1949年 北海道生まれ
1972年 工業意匠学科卒業(2回生・鈴木研究室)
現在 デザインアートセンター 専務取締役

早いもので1972年に卒業し、この会社に居ついてしまった。息子は同じ工業意匠学科を卒業し、紆余曲折ながら今年から私の部下になっている。自分の時と同じように仕事が進むと思っているが、息子は息子なりに思いもあるのだろう。色々葛藤があるが息子が私の会社に来たことで、ある意味“ホット”している面もある。三人の息子を育てたが、まだ末の子が東海大で3年生、もう少しで親の責任も終わる。次男はさっさと嫁をもらいわが道を歩いているが、これも又安心して見ているつもりだ。私の親は当にこの世を去り、嫁の親父に大変世話になったが今年の4月に他界した。自分の親を無くした以上にショックだったし、家族の絆が又一段と強くなったと思う。嫁は実家に帰って母親の世話をしだした(実家は歩いて3分)。なんとなく自分の時間が出来て今年から習字の塾に通うことにした。子供達が通った塾で気心も知れていて毎週土曜日机に向かい筆を握ると、ひと時の静けさと心の充実を感じる。

会社も昨年から新人を起用してこの不透明な現実を打破するべく優秀な人材を集め会社の変革を目指している。そんな中、息子もその一員なり頑張っている。今私は営業本部長の席にあり、会社全体の動きとお客様に常に目を向けた活動をしている。すごく責任が重いと心から思っている。そんな中、私の友人の勧めで今中国でのビジネスにチャレンジしている。新しい仕事の始まりはいつもどきどきワクワクである。

年齢を過ぎ名詞に肩書きが付くとなかなか一般のお客様は構えてしまう。部下の立場もあり、あまり現場で“でしゃばれない”葛藤もある。話は違うが先週お客様とゴルフの際初めてホールワンをしてしまった、これも何かの始まりのような予感がする。あと10年いや15年この仕事で頑張ったら悔いは無いと思っている。

東北工業大学の益々の発展と卒業生の益々のご健勝をお祈りしています。

日々の暮らしの実践 を通して自己を磨 きつつ、親父をの り起えたい！



井出 好則(いで よしのり)氏
1976年 東京都生まれ
1999年 工業意匠学科卒業(29回生・菊地研究室)
現在 デザインアートセンター

平成11年の春、大学を卒業してすぐに私は舞台美術製作(大道具)の世界に足を踏み入れました。きっかけは、単純に「面白いんじゃないかな?」ということと常に体を張り、実物で形づくる世界に強い興味を抱いたことからでした。

しかし、いざこの世界に入ってみると大道具の世界では、「尺貫法・足袋と雪駄の義務付」の世界で、何もかも大学では体験できないことばかりでした。大道具とはそもそも見世物ですから、セットを造るときはいかに本物に偽せて造るかが最重要視されますし、瞬時の判断力と強い感性を常に求められます。

4年の国内の実績を足がかりとし、より強い刺激を求めたロンドンでの実践では、ファッションショーの会場を中心にカーペンターとしてやってきました。イギリス人との一緒の仕事や日々の暮らしを通して感じたことは、彼らの感性がすごく鋭いことです。伝統ある芸術や文化を背景にした日々の暮らしの中で鍛えられているゆえの感性とも受け取れました。実践の中で自己を鍛えることこそデザインの最大の学び方とも思われます。そのことは、私が工業意匠学科の空間デザインコースで学んだ方法と同じ導き方とも実感しました。特に空間デザインの世界は、その時々要求される多くの要素を繋ぎつつ、瞬時に組み立てることが要求されます。従って、日々の暮らしの中で自己を見つめ鍛えることが大切だと、これまでの経験から学んだことでもあります。常に失敗をしつつ自分を裸にして取り組むことが若者らしく生きることであり、それが20年後の自分につながるのではないかとも思われます。言葉で伝えられなかったら体を通して伝えることからはじめるのもいかなもののでしょうか。失敗を恐れずに常にチャレンジする後輩の皆さんに大いに期待すると共に、今後の工大の益々の発展をお祈り申し上げます。

タブでなければ 生きて行けない

株式会社ユアテック

<出席者>

鈴木誠太郎／経営企画部・部長（電子工学科、藤野・菊地研 S47 卒）
川村 公文／電力本部 土木建築部・部長（土木工学科、大沼研 S48 卒）
菅原 秀樹／福島支社 営業部・部長（電子工学科、半沢研 S49 卒）
伊藤 義広／宮城支社 工務部土木建築課（建築工学科、谷津研 H 元卒）
川上 武展／経営企画部 システム管理グループ（通信工学科、小島研 H8 卒）
遠藤 智志／情報通信本部 情報通信部 情報技術グループ（電子工学科、杉田研 H16 卒）

榎本 幹／東北工業大学電子工学科科長（電子工学科 1 回生）
司会／小野寺 博之（本学就職課長）



ユアテック 本社ビル

小野寺 ■まず、会社概要とそれぞれの仕事についてお聞かせください。

鈴木：当社の組織は、営業本部（営業部、ソリューション部、設計・積算部、設備技術部、営業企画部）と電力本部（配電部、送電部、発変電部、土木建築部）、情報通信本部（情報通信部）などがあり、社員数は4,000人、事業所90、関連企業17社で構成されています。

当社は、1944年に東北7県へ電力を供給する「東北電気工事株式会社」として創業以来、電気、情報通信、空調、衛生水道、消防、土木、建築、設備工事全般の施工はもとより、企画や設計、メンテナンスサービスなどの幅広い業務を通じて、東北電力や官庁関係など社会や地域のあらゆる方面で活躍しています。

私の所属する経営企画部は、会社の経営・組織等の計画策定、経営管理情報の提供等経営層のスタッフ業務、情報システムの計画・管理・開発業務、ISO業務およびグループ事業推進業務があり、その中で私は情報システム業務を担当しています。3年前から業務改革がスタートし現在は「新情報システム化計画」を推進中ですが、今年中には全てのシステムを稼働させようとしていますので、今が一番忙しい時期です。

新情報システム化計画とは、新しい情報システムを取り入れて諸問題に対処しながら、今までのシステムと融合させたベスト・オブ・ブリーズというものです。その中で私の仕事は新情報システム化計画推進事務局と営業・工事の総括を担当しているので大変です。具体的には現場の工事支援を重点に開発しています。計画はほぼ順調といったところですが。

川村：私は電力本部の土木建築部に所属し、営業をやっています。以前は東北電力さんの仕事だけでしたが、近年は一般官公庁、大手ゼネコンの一般土木工事の受注に力を入れています。

私は5年前に開設された土木建築部の営業担当の第一号で、最初は一人で営業活動をしていました。それから5年経

過して現在は営業担当者が5人になり、東北7県の土木建築部の営業活動をしています。主に、電線を土の中に埋める電線共同溝工事を官公庁や東北電力さんなどから受注していますが営業的にはかなり受注が見込まれると思います。また、東北電力、一般の住宅、関連協力会社の建築も受注しています。

菅原：私は情報通信本部の開発営業を担当し、現在は福島支社営業部に所属しています。工大を昭和49年3月に卒業後入社して31年になります。入社以来ずっと情報通信部門に勤めてきましたが、景気低迷という社会状況もあって現在は営業部門です。“e-Japan構想”に基づき、各自治体の電子認証を推進するネットワークを組むための光通信工事を中心に、防災無線関連工事、自治体や国土交通省の光通信工事、地上デジタル放送関係の開発営業を推進しています。その仕事を処理するのが施工技術を担当する遠藤君の部署です。

川上：私は、先ほど鈴木部長から話がありました経営企画部の中のシステム管理グループという部署にいて、新情報システム化計画の推進業務と、“Y・TOS (Yurtec total office system)”という基幹システムが毎日正常に可動しているかを監視する業務をしています。具体的に一番多い仕事は、基幹システムの使い方とかシステム活用の相談ですが、パソコンへのインストールの問題や小さなトラブルへの対応もしています。

私のグループは7名で、外注を使いながら毎日全社員4,000人を相手にシステムを見守っているわけですが、システムというのは、ある意味会社の中樞神経の部分だと思っていますので、責任もやりがいもあります。

鈴木：川上君のいる管理グループは、忙しい部署です。



鈴木 誠太郎氏



伊藤：私は先ほど川村さんからお話があった土木建築の建築を担当しております。営業が取ってきた仕事を、宮城支社という現場の最前線で施工する形ですね。工事は東北電力さんの変電所の建物や社宅の改修など、ある意味特殊な工事を幅広く手掛けています。

最近、東北電力グループ企業からもご協力頂いていますので、一般工事の受注も伸びています。当社は電気、設備、通信、土木といろいろな部門があるので、建築業界から見れば非常に相談しやすいし、お互い協力し合う部分が多くて仕事が進め易い会社だと思います。

遠藤：私は情報通信部に所属し、今携わっている業務は地上デジタルテレビ関係です。現在は岩手に出張し、来年開局予定のケーブルテレビ局の各種申請業務をやっています。

小野寺 ■ 部門間の異動は結構あるのですか？

鈴木：もちろん部門によっても違いますが、人事異動は結構あります。私は、入社時から10年位は石油・ガスプラントの電気工事を専門にやり、今は経営企画部ですから。

当社には人材開発センターという研修センターがあります。そこで行われる新入社員教育は部門によって若干異なりますが、私が最初に配属された部門の研修は、今でもやっていますが、3ヶ月間くらい宿泊して部門の基礎を勉強します。会社の技術レベルと大学で教わってきたこととは違いますからね。あの当時の宿泊は辛かったですね、今まであんなに勉強したことはなかったですよ(笑)。

菅原：我々が入社した頃は、社名が「東北電気工事」の時代でした。その後社名が「ユアテック」になり、業務内容も電気工事から総合設備会社へと変ぼうを遂げました。

川村：社名変更によって社員の意識改革がされ、以来、社員の仕事ぶりもすっかり変わりました。

鈴木：あの時は景気もよく、新入社員も多かったね。

菅原：私が入社した昭和49年の新入社員は153名。今年は60名(内、工大からは3名)です。バブル絶頂期は新入社員が300名という年もありました。

伊藤：私の卒業は平成元年。当時は求人も多く学生1人が3社、4社に合格するような時代でした。私の場合も、候補の1社に当時の東北電気工事株式会社がありました。当社を選んだ理由は、私は宮城出身で、そんなに遠い地方に勤めたくないという理由からです。他の企業の勤務地はすべて全国だったのですが、東北電気工事の場合は東北地方6県プラス新潟県が勤務地だったので、それだけで決めてしまいました。

いざ入社してみると、入社して2年目の平成3年に秋田に転勤し、それから7年ほどの秋田勤務がすごく過酷でした。

何が厳しかったかという、考えられないほどの雪が降ったことです。私が転勤した平成3年2月の初日が大雪で、当時変電所の基礎を作っていた現場では、基礎がどこにあるかわからない状況でした。しかも「工事がすでに1ヶ月も遅れているから、よろしく頼むよ」と言われたのです。24歳で転勤して現場監督になり、いきなりこの状況ですからね(笑)。午前中は雪かきだけで終わってしまう状況でしたのでごいプレッシャーでした。その2ヶ月後くらいでストレスから胃を壊してしまったのですが、あの時、私は自分からその土地や現場の人たちにとけ込もうとがんばりました。言葉の問題、人間関係、コミュニケーションの大切さを痛感しました。それが後に自信になりました。秋田に行って良かったなあと思います。今のかみさんも秋田で見つけてきましたしね(笑)。

榎本：学生時代は人間関係にもまれるということが少ないから、貴重ないい体験をしましたね。

川上：私が最初にユアテックという会社を知ったのは仙台の予備校に通っていたときですが、当時あのロゴが「ユアテック」と読めませんでした(笑)。その後入学した大学が工大です。

3年生から就職活動を始め、いろいろな企業の資料の中から仙台にある会社を探していたら、パッと出てきたのが昔に見たユアテックのロゴでした。それから急にユアテックが気になり出し、会社の詳しい業務内容、待遇や条件などを調べるようになりました。

菅原：当社が一部上場企業というのも就職の決め手ですよ。ね。

伊藤：私が当時、就職する条件として重要だと思ったことは、労働組合があるということでしたね。

労働組合があるということは、会社が労働者のことを考えてくれているからだと思ったからです。

今考えるとあの頃はバブルの時代だったのでどこに就職しても良かったのですが、現在のような不況の時代になり同級生がリストラされたなどと聞くと、この会社に入社して良かったと思います。

工大は仙台を背負って立っている

鈴木：当社の工大出身者では、平成元年から3年にかけて入社した後輩が多数おります。川上君の年代よりちょっと上で、現在は係長クラスの職位の人たちです。

システムユーザー教育で出張した際に、東京本部の佐久間君や札幌支社の阿部君に会って話をしたのですが、役職に就くと考え方や顔つきが変わってきています。彼らは、頑張れば結果がついてくることを実証している工大の同窓生です。

川村：工大は仙台を背負って立っていると思いますよ。

榎本：それは会社内ということではなくて…？

菅原：はい。仙台市内の企業全体を見ると、私の工大卒同期の人はそれぞれ会社を担うポストについています。彼らには「仙台を背負って立つのは工大しかない、他の大学



川村 公文氏

には負けてられない」という意識があります。

当社には東北学院大卒が約 250 名、工大卒と工大高校卒は合わせて 130 名ほどの社員がいます。東北学院大は歴史があるから役員もおりますが、当社の中では工大出身者の評価は高くなってきていると思います。

鈴木：当社の工大出身者は、情報通信や土木建築部門に多数在籍しています。経営企画部や管理部門には少ないのですが、設備技術部にもかなりの人数がいます。

菅原：仙台市内や宮城県内の地元企業さんの、社長や重役を見回すと工大出身者が多いのです。ここ数年くらい前から増えてきました。それだけ工大出身者の実績が認められてきたということでしょう。そういう工大の先輩後輩という関係から、当社が地元企業さんの仕事をお手伝いしたり受注したりすることも増えてきました。



菅原 秀樹氏

小野寺 ■ 去年発行された本誌に、御社の同窓会設立の様子が掲載されましたね。

鈴木：そう、去年の今頃でしたね。その半年位前から、当社には工大出身者がかなり増えているので同窓会を立ち上げようという話がありました。そこで調べてみたら、当社ではやはり東北学院大出身者が一番多いのですが、次が工大出身者でした。私自身も、社内で一緒に仕事の話はしているのに工大の同窓生だとわからなかった人も結構いましたね。

企業内の同窓会設立によって横のつながりを持つことは仕事にも好影響があると会社に設立を相談したところ、会社側も応援してくれることになりました。同時に工大と当社の交流や発展に結びつくのではないかと、ユアテック東北工大高校・大学設立記念パーティに工大理事長や工大同窓会会長を含め工大関係と当社の役員を招待し、懇談する機会を持ちました。

当社の「ユアテック東北工大高・大学同窓会」初代工大同窓会会長は亀田さん（通信工学科 4 回生）でした。ところが、その亀田会長が関連会社の役員として出向することになったため、同窓会役員会が開かれ、その席で私が新会長に指名されました。まだ総会を開いていないので正式には会長ではありませんが、近々には新体制を整えて尽力したいと考えています。当社の「ユアテック東北工大高・大学同窓会」もまだ設立して 1 年ですが、社内の横のつながりと、工大と当社との発展的な交流を考えながら長く同窓会活動を続けて行きたいと思っています。

菅原：あのとき社内の工大関係の卒業生を改めて調べたら、130 人ほどいたのですから、ビックリしましたね。

小野寺 ■ 今後、工大と御社同窓会との発展的な関係とは、どのようなことですか。

鈴木：まずは、社内の同窓会名簿をしっかりとつくって工大に協力していきたいと思います。同窓会に参加していない人もいるようなので。

榎本：会社内の同窓会は、仕事の立場や関係で難しいことがあるからね。

鈴木：確かに後輩にも文句を言われることはあるでしょう。でも、今回同窓会を設立したことで、先輩後輩という関係を越え、堅いものが柔らかくなればいいと思います。

菅原：私たちの時代は、各学科がそれぞれ単体で同窓会活動をしていましたね。私は電子通信工学科の同窓会で副会長でした。それが大学設立 20 年という節目に、工大全体の同窓会が設立されたのでしたね。

今、当社が工大と同じ時期を迎え、昨年社内に工大同窓会を設立しました。そうしたら、「君は土木出身だったのか、あいつは建築出身だったのか」ということがはじめてわかり、業務的な相談もしやすくなりました。ますます工大のパワーが強まっていく感じです。

鈴木：私が初めて工大の同窓会に出席したのは工大卒業の 2 年後だったでしょうか。あの当時は電子通信だけの同窓会で、参加者は 60 人くらいでした。ところが去年の同窓会に久しぶりに出席したら素晴らしかった。人数もたくさん集まって盛大でしたね。

これからの大学に望まれること

榎本：大学は今危機を迎えようとしています。それはなぜかという点と大学志願者が徐々に少なくなってきているし、入学する学生のレベルも下がってきているからです。今後の大学の命題は入学志願者を増やすことであり、優秀な学生がいることが大学の評価につながると思います。工大の先輩には素晴らしい人がいっぱい



榎本 幹教授

ますがこれからはその火が消えてしまうかも知れない。「工大って、何なんだ」ということになりかねないのです。

かつての電子工高が工大高と名前を変えましたが、私が工大高に出向いて教えてもかまわないし、その逆に工大高の先生が工大に来て教えたっていいと思います。工大と工大高はそういう関係であることをもっと社会にアピールすべきです。人間形成の上でも高校と大学が一体になった環境で勉強できるということが、これからの工大の教育には必要なことであると思います。

菅原：榎本先生が推薦する学生なら、採用しろといわれれば採用します。私は人事担当ではありませんが、工大と当社みたいな地元企業との関係においては、そういった強い結

び付きや信頼関係が必要であると思います。

ところで、この座談会に臨むにあたって工大のホームページを見ましたが、はっきりいってあまり良くありませんね。私たち企業の人間が大学の先生に直接アクセスできたり、大学の学長と入学を希望する高校生がホームページを通じて会話が出来たりするようにすればいいのに。風通しのいいホームページと言うか、人と人の1対1のつながりを大事にしてほしいですね。結局それが工大のためになると思います。

工大出身者はタフ、社会への対応力がある

鈴木：当社は自ら辞める人が結構いますが、工大出身者に限っては辞める人が少ないですね。当社が求める人は、学業の良さだけではなく人間性や人付き合いの中で“タフな人間”です。先程伊藤君が言いましたけど、人間と人間のつながりが仕事を上手くこなすコツですし、人のつながりがないとどんなに優秀でも現場の仕事は完成できません。人間的にタフな人でないと、会社としては人の上に立てないのです。その意味で、工大は企業に求められる人間教育をしてきたということですね。

菅原：タフな人間は良いですね。病気がちだと会社でも次のステップはないですからね。私の後輩が経営する会社ではずっと工大卒を採用していますが、その理由は「タフだから」。工大出身者はタフですよ。

小野寺 ■ 工大が送り出す人材について、他に要望はありますか。

鈴木：明るく社交性のある人です。

菅原：おそらく国公立大卒と私学大卒では能力的にはあまり変わらないと思いますが、私学大卒はどこか負い目や引け目を感じていても、根性だけは絶対負けたくないと思って入社してくる。例えば遠藤君が「もう辞めたい」と言っても、我々は工大出身者の実績や会社への貢献度を知っているから、手を差しのべる。後輩もその期待に応えようとしているから、途中で辞めた工大出身者が少ないのだと思います。



遠藤：工大人は熱いですね。特に情報通信部には電子と通信工学科出身者が多いからかも知れませんが、工大の先輩には助けられます。

榎本：頭の良い人と勉強の出来る人というのは違う。頭の良い人というのは人間性も含めたトータルでの良さです。東大を卒業した人はすべて頭が良いかというとも必ずしもそうではないし、勉強が出来ても役に立たないこともあります。社会に出ると、トータルで頭が良いというのが評価の基準になるはずですよ。

鈴木：頭が良い人は社会に対応できる。それがあある意味、工大生の特性かもしれませんね。

榎本：私は学生に話すのですが、大学で学ぶカリキュラム半期分の講義は会社で行う集中的な研修の一週間分だよね。つまり、興味を持ち好きになればあっという間にプロになるということ。だから職業を選択する時は、嫌いなところに行ったらダメということです。

遠藤：学生時代に所属した研究室では、研究という作業の中で、社会に出て耐えられるかどうかの人生構築をさせてもらったと思います。だから今の私があるのだと思います。その恩返しするとすれば、学校と会社の橋渡しでしょうか。「工大は他の大学とは全然違います。工大出身者はタフだしすぐ諦めたりしないでしょ」と、会社にアピールしてもいいと思います。先輩方はすでにフォローをしてくれています。

小野寺 ■ 大学時代の経験で、有意義と感じたことはありますか。

川上：恥ずかしい話ですが、私は大学にはあまり行ってなかったんですよ(笑)。でも、テストはきちんと受けていましたし、実験も出席してレポートを書いたし、留年するようなことはありませんでした。大学へあまり行けなかった理由は経済的なことで、アルバイトをしていたからです。そのアルバイト先の人達にすごく恵ま



川上武展氏

れて、プロ意識を教えてもらいました。もちろん、そんな経験も大学の友人がいろいろ協力してくれたからからこそできたことで、大学での人間関係を粗末にして自分勝手にアルバイトばかりしていたら卒業できなかったと思います。

大学ではパソコンを使うシステムの研究でした。在学中から就職候補だったユアテックには、情報システムと情報通信の仕事があることは知っていましたし、そんな仕事に就きたいと望んでいましたから。ところが、入社してはじめて配属された部門が内線でした。入社した年の8月から仙台駅前再開ビルのアエルの現場に行き、ヘルメットをかぶって作業着を着て、電気屋さんに教わりながら電気をつける金具の

取り付け作業。しかもビルの地下での作業が多かったんです。もう、心の中では「自分は何をやっているんだろう？」という葛藤がありましたね。でも、この部門でも良い先輩に恵まれたし、教わった職人さんも経験が豊富でとてもいい方だったんですよ。その方々にいろいろ相談していました。そして、やらなきゃいけないことが目の前にあったら、やらなきゃ行けない。お金を貰って教わりながらできるありがたさを、現場に行って半年位ほどしてから理解できるようになりました。「やりたいことは他にあって、今、やらなきゃいけないことは、とにかくやり遂げる」と、自分の考え方が変わってきました。現場で「おまえは使えない」と言われるような人間になりたくなかったし、やるからには「良くやった」と言われる仕事をしよう。そう思えるようになったのは、先ほど話した先輩や職人さんのおかげです。

その現場の次は設計積算部という本社の部署に配属になり、そこでも上司の人がすごくいい方でいろいろ教わりながら仕事をしましたが、自分がやりたい業務へ配属希望も出していました。配属希望を出すからには、今の仕事を完璧に遂行するぞ、という気持ちで頑張っていました。

情報を共有するシステム化

榎本：後輩の参考のために聞くけど、学生の頃に考えていたシステムってなんですか。

川上：実は、学生時代に得た知識は、テレビやインターネットで得た程度の知識しかありませんでした。当時は華やかな世界を想像していましたが、今思えば全然違いますね。

榎本：システムというのは時間とお金がかかるもの。構築するまで大変でしょう。

川上：システムというのはあくまでも道具でしかなく、それを使う人がどのように使うかが問題ですよ。

鈴木：現在当社が推進している新情報システムの開発には、相当な投資を行っています。また、このシステムは、現場では施工管理ツール、営業には営業支援システムというようにそれぞれの仕事を支援するためのツールになっています。これは営業から現場の人までが、一つの情報を共有しようという目的でつくられたシステムです。

川村：誰か一人に伝えたいだけなら電話一本でいい。でも、当社の新システムは、経営層から部署の隅々まで情報を共有化するという事です。だからある営業が取ってきた仕事を全社の事業所で知ることが出来るという状況にしたということです。

今、ひとりの担当営業が、相手先で即決を求められる状況が非常に多い。事業所に戻って検討し、上司に判断を仰いで後日返事をするということはほとんどありません。そういう時のために、管理しやすいようにシステムをつくるわけです。

鈴木：相手企業からは、すぐ決断の出来る人が来て欲しいといわれています。即断即決できる人間じゃないと相手

にされなくなっているのです。

技術や経験を活かす営業とシステムの融合

菅原：即断即決できる人材になるためには、入社して技術を磨いて知識を蓄積し、それから営業にいった方がいいと思います。企業は受注あつての利益創出です。私も30年間技術をやってきましたが、その経験を活かすために去年から営業に配属になりました。

榎本：営業マンが仕事を取ってこないと企業は成り立たないものです。技術をやっている人は営業をやることになるのは当然であり、それだけ会社は経験を積んだ人を必要としているということではないですか。

川村：技術屋さんと営業屋さんが一緒に行かないと決められないというのではなく、今は技術屋で培った知識を営業として活かすことが出来る方が経営的には効率的です。

川上：営業とは数字ですが、そのバックボーンには先輩などの知識や経験が必要だと思います。今、当社が開発しているシステムは、経験の少ない若手や技術の経験のない営業さんが、お客さんに対して即答するためのバックボーンになると思います。過去の実績や手段や経験を全社員が情報として共有し、経験の少ない人がそのような情報を基にお客さんと交渉するというように。バックボーンとは社員一人が自己満足で作ってきたものではなく、会社としての情報であり、それを身につけて会社を代表して交渉できなければいけないですね。

それから、先ほど鈴木部長が言ったように、支援としての情報に加えてその人の努力も重要でしょうし、人から教えてもらった経験で仕事を円滑にできる部分もあると思います。システムがあるから大丈夫というのではなく、人間の努力や経験が融合したものこそ本来のシステムのあるべき姿じゃないですか。システムなんて要らないという意見も理解できます。経験を積んだ方々からすれば、情報を入力するよりも電話したほうが早いと感じるでしょう。でも、経験のない若い人にとっては、仕事の参考になる情報が身近にあったほうがいいと思います。

鈴木：当社の現状では、現場は若い人が多いのです。そういう若い社員に対して、先輩達が蓄積したノウハウをしっかりと提供するというのが当社の支援システムの考え方です。



新潟スタジアム「ピックスワン」

システム化するにあたって、会社の部門ごとに業務フローを洗いざらい調べました。それから社内の各部門の情報を調査し、情報の共有化が出来るシステムにしました。

私と川村君と菅原君はもう勤続30年間だからもう古い(笑)。失敗も成功も怒られたことなど、実践で多くの経験をしているから身に付いている部分も多いのです。その貴重な経験を会社がデータ化し、若い人達の判断の一つにしてもらうために支援提供しようとしています。それをどう活かすかは利用する本人の判断ですけど、若い人にはそのシステムを活かして欲しいですね。

人とのかかわり合いを学べ

小野寺■先輩から学生へのアドバイスをお願いします。

伊藤：まず、大学時代と会社とは全く違うものです。大学で想像していることが、会社でも出来るということはほんの数パーセントだということを認識して欲しいですね。

私は学生時代に設計事務所でアルバイトをしましたが、自分は設計に向かないことがわかりました。そこで建築現場の仕事に就きたい、建築の現場で一から建物をつくってみようという単純な発想でこの会社を選んだわけです。ところが、現場では学生時代の気持ちや甘い考えは少しも通用しませんでした。

先ほど川村部長がおっしゃった通り、その場で判断しないと行けないということがひとつ。経験を積むためには先輩の経験やアドバイスを素直に聞くということも現場では必要です。自分の判断だけではなく、多くの経験を積んだ人達からのアドバイスを聞いて、それを実行したときに納得できて初めて自分の経験として蓄積されるのだと思います。これが、私がユアテックに入社して感じたことです。

先ほども話しましたが、私が秋田にポンと行かされて現場を任せられたとき、先輩から、まず下請けの社員を全員集め、自分がこの現場に来たということを知らせて工程を全部洗い直せ、とアドバイス受けました。そして、現場の親父のような人達に対して、「私は経験がないので皆さんの言われたことに対しては、何でも受け入れます。私を助けてください」と素直に話しました。結局、現場の皆さんに助けってもらいましたが、助けってもらったということが自分の経験になりました。

さまざまな課題に自分から飛び込んでいかなければならないということは、大学との違いです。学校では教えてくれない事も、社会ではたくさん学ぶことが出来ます。自分が目ざした設計事務所の仕事に疑問をもったことが、今の会社を選ぶ発端になったわけですが、学生時代はアルバイトなどをして経験した上で仕事を選ぶというのも一つの手段ですよ。



伊藤 義広氏

遠藤：私はまだ先輩方のような経験は少ないのですが、今こうやって話を聞いていることの全てがいい勉強であり経験になると思います。

川上：自分の知らないことを覚えるために、最初の3年間が大切。3年を過ぎるとあまり人に聞けなくなってきましたから。その3年間で多くのことを吸収するためには、やはり我を張ってはいは教えてもらえません。もちろん、見て技術を盗むということもありますがね。

社会人と学生の違いは、自分の時間の多さだと思います。学生時代の時間の多さを有効に使って、いろいろな人に出会ってさまざまなことを学ぶということです。学生時代に興味をもったことに時間を使い、得るものを得て、経験を積むことが大事だと思います。自分の時間を使って積極的に就職活動もやって欲しいですね。先ほどの設計事務所でアルバイトしたという話のように、学生時代は引き返す時間もあるのですから。

最終的に必要なことは、「タフさ」だと思います。人間同士のかかわり合いの中で精神的な強さを持つことは、結局は自分のためになりますし、社会や会社で上を目指すためには絶対に必要な原動力になると思います。

川村：私は大学4年間で土木を学びましたので、卒業後は土木関係の仕事に就き、あちこちでスコップを持って…と、自分の姿を想像していました。その結果、ユアテックに入社し、今は土木建設部の営業を司る部長という立場になりましたが、人との付き合い方は、大学時代に70数件のアルバイト先の先輩や経験で学んだものだと思っております。現役の学生や今の若い人は、私たちが若い頃より学業のレベルは高くなりましたが、勉強だけではなく人付き合いをもっと学んで欲しいと思います。

菅原：私もそうですね。4年間住んでいた寮にはいろいろな学科の人がいましたが、寮に住む他学科の先輩や同級生の、測量やデザインの色付けなどの手伝も数多くやりましたよ。今思えばいい経験でしたね。寮やアルバイト先で人の付き合い方をすごく覚えたような気がします。怒られて、「すみません」と頭を下げていたことが今の営業に活きていると思います(笑)。名前を覚えてもらって、困ったときに助けを求めよう。助けられたときは、次に何かで助けてあげるといった人間的な関わりを学びました。寮という場所は人とつながりが持てるし、人の付き合いを経験するにはすごく良かったと思っています。

小野寺■貴重なご意見ありがとうございました。

(取材：2005年6月17日)



遠藤 智志氏

支部活動報告

新潟支部

頑張っていこう新潟！！

同窓会新潟支部会 会長 篠川 恒

東北工業大学同窓会設立 20 周年おめでとうございます。

昨年、新潟支部会は 7・13 水害、そして 10・23 中越大地震と 2 度の自然災害に見舞われ、11 月に予定していた新潟支部総会が中止になってしまいました。その節は皆様からのご声援をいただきありがとうございました。今年に入梅も遅く被災地の復興も進むかと思っていましたら、遅れた梅雨入りと同時に洪水と自然災害に明け暮れてあまり良い話がありません。しかしながら被災地では、「頑張っていこう新潟」を合言葉に復興が進んでいます。

新潟支部会では、新潟出身の在校生の減少が目につくことを踏まえ、後援会新潟県支部と、同窓会新潟支部会とで、どのようにすればより良い活動が可能かを考えなくてはならない時期にきているような気がします。皆様方のお知恵を拝借しつつ、一步でも良い方向に進めるよう頑張りたいと思っています。

同窓会本部ならびに、同窓会各支部の皆様のご健康と、ご活躍をお祈り申し上げます。

北海道支部

後援会・同窓会・父母・大学教職員合同懇親会を開催

東北工業大学父母懇談会 (札幌会場)

去る 6 月 5 日 (日)、札幌市北農健保会館を会場に父母懇談会が開催され、終了後、父母を交えた「後援会・同窓会・父母・大学教職員合同懇親会」を行いました。

これは、以前から、懇談会出席の父母より道内在住で本学卒業生の声を聞く機会が欲しいとの要望が寄せられており、菅野支部長のご協力により今回初めて実現したものです。

当日は佐藤善信 (伊藤組土建)、奥塚恒一 (札幌市役所) 両 OB をはじめ、齋後援会長、今野教務部長 (土木工学科 1 回生) と在学生のご父母が参

加し、和やかな懇親となりました。

最初はぎこちなかったもののアルコールとともに、場も和み楽しくかつ有意義な懇親となりました。OB からは、同地区の経済状況、就職状況などのお話があり、父母は勿論のこと、私たちにとっても、大変興味深いお話を聞く機会となりました。

最後に、8 月末に開催の、北海道支部総会の準備をお願いし、再開を約束して散会となりました。

青森支部

面倒見の良い大学を目指して！！

東北工業大学後援会主催による青森県父母懇談会前日 (6 月 3 日) に開催した同窓会と後援会の支部連絡協議会も、大学および後援会関係者の協力を得て、今回で 5 回目となりました。会は、後援会役員、同窓会支部役員、青森県在住同窓生、そして、本学の同窓生教職員等の出席者全員の自己紹介の後、後援会、大学そして同窓会の近況報告がありました。その後、青森県エリアの仕事においても同窓生と接することが多くなったことや、就職支援や同窓生の子供の進学についての話題に集中しました。中には、「工大は親が良く知っている環境であり、面倒見の良い大学であることから、2 人の子供を進学させた」という支部幹部 (建築学科卒) の紹介もありました。

今後は、青森県エリアにて仕事をしている同窓生が多いことから、日常的なやり取りをとおして、同窓生としての連携をさらに強めていただきたいと思います。それにより、大学に新たな循環が生まれると思われれます。また、大学を大切に思う帰属意識を高めることに繋がると考えます。

最後に、同窓生の後援会支部役員が新たに生まれること、この会のさらなる発展を願い終了しました。

インターンシップ体験記

貴重な体験をした9日間！！

電子工学科 佐藤 恭史

私は、昨年夏休みに宮城県の名取市にある仙台ニコン(株)で9日間、インターンシップに参加してきました。この会社は、精密機械加工技術、成形加工技術に加え、カメラのエレクトロニクス化をリードする高密度実装技術及び高品質を実現する自動組立調整技術など、最先端の技術を導入して、ハイテクノロジーカメラを生み出しています。

今回の実習内容はカメラのレンズを加工する際に作業者が分かりやすく、かつ使いやすいプログラムを作成するというものでした。プログラムはExcelを用いて作成していきました。大学でEXcelを学んでいたので多少のことはできましたが、何度も指導者の方に聞きながらやっとプログラムを完成

させることができました。実習最終日にはジェネラルマネージャーの前でプレゼンがあり、とても緊張しましたが良い経験になりました。一つの仕事をやり遂げるのは容易なことではありませんでしたが、目標を達成できたときの充実感を味わうことができました。また、仕事仲間同志のコミュニケーションをとることも大切であると思いました。信頼関係があつてこそ良いものができるのだと思いました。

インターンシップは大学では学べない貴重な体験ができるので、興味のある人は是非参加して欲しいと思います。



コミュニケーション能力をもつことを実感！

通信工学科 佐々木 克敏

私は、3年生の夏休みに、(株)システムズでインターンシップを行いました。2週間という短い期間の中でしたが、大学の講義ではなかなか得られない貴重な体験をすることができました。

研修内容は大きく分けて2つあり、1つは視聴覚設備の営業に同行するという内容、もう1つは電気通信工場の現場を見学するという内容でした。

営業の方(セールス・エンジニア)に同行していて感じたことは、技術や設備はどんどん新しくなり、進歩していくので社会人になってからも仕事に必要な知識を学び続けなければならないということです。

また、電気通信工場の現場ではIPカメラとスピーカーの取り付け作業を見学しました。この2つの端末はLANで宮城県警に繋がっているということでした。大学で学ん

だことが実際の社会の中で利用されているところを見ることができたのは良かったと思いました。それと同時に今まで学んだこととこれから学んでいくことの重要性を改めて実感しました。

どちらも仕事の内容は違いましたが、共通して言えることは1つの企業だけで全ての仕事をするということは少なく、多くの場合は他の企業の方と協力して仕事をやっていくので、人とのコミュニケーションをとる能力が非常に大事だと思いました。

2週間、社員の方々は親切にいろいろなことを教えてくれました。そして、自分の中でも就職や仕事に対する意識が変わるきっかけになりました。非常に有意義な2週間だったと思います。できるだけ多くの後輩にインターンシップに参加して欲しいと思います。



インターンシップ体験記

大学生活では経験できない体験

私は大学3年の夏休みに宮城県庁土木部で2週間のインターンシップに参加しました。

実習先では、実際の道路を元にしたB/Cの算出、GIS活用整備効果システムの解析などの仕事を体験しました。インターンシップの課題として、道路建設課のHPのリニューアル案を提案して、トップページのリニューアルや追加ページの作成をしました。

これからの宮城の道づくりについてや、長者原SAにおけるスマートICについてなど、今宮城で行われている道路計画についてたくさん説明をしてもらいとてもためになりました。また、橋梁、ダム現地調査に連れていってもらったり、実際の会議に

土木工学科 木村 香



も出席させてもらい会議の緊張感も体験することができ大学生活では経験できない貴重な体験をさせてもらいました。

インターンシップでは、実際の職場の雰囲気を肌で感じる事ができ県民のために働いている職員の方たちの姿を間近で見ることができてとてもいい機会だと思います。後輩にも是非この機会を利用して、これからの就職活動のプラスにして欲しいと思います。

わずか10日間で。

時間が足りない。1秒1秒が真剣勝負。「効率よく仕事をする」事の重大性を知りました。

主に、「模型制作」を行いました。事務所への依頼は数少ない、一般住宅でした。お客は、平面図だけでは「家が建った様子」が分かりづらく不安なものです。模型で立体的にすることで想像しやすくする、という重要な役割を任せられました。デザインの要望はすぐ変わります。「明日の昼までにこの家お願いね」10日間で3度頼まれてしまいました。私は今まで、余裕を持って作業をしていました。やり直しを繰り返しては、納得するものを作ります。どうやら社会に出るとそうはいかないようです。やり直す時間はありません。常に気を抜くことはありませんでした。「会社のため、お客のため」という考えが1番でした。それが最

建築学科 成田 香奈子



後に「自分の力」になります。学生と社会人の違いのひとつです。

私がこの状況をうまく乗り越えることができたのは、一緒に参加した学生の存在が大きいと思います。より良いものを作るにはどうすべきか意見を出し、時間配分・役割分担をしました。協力なくして、仕事はできない。1人で仕事をしていても、それは会社に依頼された仕事の一部にすぎません。複数の人の力がひとつになり、ようやく完成します。全員が最善を尽くさなければ「最高のもの」にはなりません。

また、「体力・やる気・元気」があれば、どんなことも乗り越えられます。(株)東北建築設計監理事務所の皆様、本当にありがとうございました。

<同窓会からのお知らせ>

東北工業大学同窓会 第20回記念定期総会・懇親会開催

同窓生会員の皆様、および大学のご理解とご支援を頂き創設した当同窓会も、本年をもって20年を迎えるに至り、皆様方には心より御礼申し上げます。

つきましては、第20回定期総会および懇親会を下記の通り開催いたします。20周年という記念すべき本総会および懇親会ですので、例年以上に大学および後援会関係者の皆様が出席される予定です。会員の皆様におかれましても、各研究室や活動クラブ、企業内の同窓生の方々にお声掛けをいただき、ぜひご出席いただけますようお願い申し上げます。

【総会議題】

<1>平成16年度事業報告 <2>平成16年度決算報告 <3>平成16年度監査報告
<4>平成17年度事業計画 <5>平成17年度予算案 <6>その他

記

【定期総会】

開催日時 平成17年8月27日(土) 16:00～17:30
会場 斎藤報恩会館(ホテル仙台プラザ隣り)
(仙台市青葉区本町2丁目20番2号 022-262-5506)

【懇親会】

開催日時 平成17年8月27日(土) 17:30～19:30
会場 ホテル仙台プラザ 3F 松島の間
(仙台市青葉区本町2丁目20番1号 022-262-7111[代表])

【懇親会のお申し込み】

卒業生会員参加費 3,000円(学生会員は無料)
参加申し込み締切り 8月19日(金)
郵便局にて、同封の郵便振替通知書でお申し込みください。
郵便振替口座 02250-6-42460 東北工業大学同窓会総会実行委員会

卒業した皆様へ

東北工業大学同窓会 会費未納の方へ「会費納入のお願い」

同窓会会費は会員間のネットワーク化事業、在学生への支援、支部活動の推進、大学および大学後援会との共同事業等を進めるために有効に活用しております。

同窓会会費未納の方は、別紙郵便振替通知書にて早急に納入いただきますようお願い申し上げます。(すでに納入済の会員には、郵便振替通知書を同封しておりません。本会運営の趣旨をご理解の上、この通知をご容赦ください。)

終身会費 20,000円

(5,000円×4回・10,000円×2回の分割納入方法もございます)

郵便振替口座 **02280-5-22263 東北工業大学同窓会**

発行 東北工業大学同窓会
事務局 東北工業大学就職課内
〒982-8577 仙台市太白区八木山香澄町35-1
TEL.022-229-1151(内線315) FAX022-229-8002
URL.<http://www2.odn.ne.jp/~aan98460>

